

2026年 年頭司牧書簡

「キリストにおける交わり」

新潟司教 パウロ 成井大介

新潟教区の皆様に主の御降誕の喜びと、新年の挨拶を申し上げます。年の初めにあたり、神の母聖マリアの取り次ぎにより、皆様の上に神の豊かな祝福がありますように、またキリストの平和が世界に広まりますようにお祈りいたします。

昨年をふり返って

昨年、カトリック教会は聖年を祝いました。レビ記25章で解説されるヨベルの年、すなわち捕らわれ人は解放され、負債は帳消しにされ、失った土地が返され、神の目に本来あるべき社会に戻る年に由来する行事です。昨年一年間、私たちは、神との関係、人々との関係、自然との関係を本来あるべき調和したものにするべく旅を続けてきました。この旅は、聖年の閉幕とともに終わるものではなく、聖年の恵みに強められてさらに進められるものです。人々の間で分断や対立、恐怖をあおる世界にあって、私たちは神の目にこの世界は本来どのようにあるべきなのか思い巡らしながら新しい年の歩みをはじめたいと思います。

宣教司牧評議会を中心に

宣教司牧評議会は、各地区からの司祭、奉獻生活者、信徒の代表、そして教区の諸委員会の代表が参加する、シノドス的な集いです。昨年から宣教司牧評議会の会議を11月に行うことになりました。教区全体の一年間の活動をふり返り、次の年の計画を立てるためです。会議ではまず、昨年一年間、神が新潟教区をどのように導かれたのか分かち合いました。そして、今年の計画について話しましたが、これからは毎年、教区全体の年間目標を定めることにしました。広い教区に点在する教会共同体が、同じ目標を持つことで、互いにつながり、学び合い、ともに歩んでいくためです。そして、今年の目標は、宣教司牧方針の第一の柱である交わりとすべきという意見が多く出されました。

2026年新潟教区年間目標

宣教司牧評議会で出された意見に基づき、「キリストにおける交わり」を2026年新潟教区年間目標といたします。なお、2027年は「宣教」、2028年は「参加」を年間目標とします。先に書いたとおり、年間目標は新潟教区がともにつながり、学び合いながら成長していくための目標であり、模擬試験の点数のような、達成目標としての目標ではありません。ですから、一年「交わり」に取り組んだらそれはおしまいにして次の「宣教」に取り組むのではなく、交わりへの取り組みを継続しつつ、その土台の上に宣教に取り組んでいけたらと思います。なお、独自の年間目標を立てている教会共同体もあると思います。新潟教区の年間

目標は宣教司牧方針そのものですので、教会としての目標を妨げるようなものではありません。教会の目標、教区の目標のどちらも大切にしてください。

シノドスの旅

2021年にその歩みがはじめられた第16回シノドス総会は、2024年10月に総会第2会期が終わった後、次のように歩みを継続しています。

- 2025年6月－2026年12月：各教区におけるシノドス流の教会に向けた取り組みの実施
- 2027年上半期：各教区における評価集会
- 2027年下半期：司教協議会における評価集会
- 2028年第一四半期：大陸ごとの評価集会
- 2028年10月：バチカンでの教会総会

2024年の年頭司牧書簡でお知らせしたとおり、新潟教区では宣教司牧方針の取り組みについての評価を2027年に行います。ちょうど、シノドスの教区における評価と重なりますので、併せて行いたいと思います。また、2028年は教区大会の年です。新潟教区年間目標の「参加」は、教区大会をより意義深いものにしてくれるでしょう。

キリストにおける交わりとは

私たちは皆、キリストによって、キリストとともに、キリストのうちに、神と、自然と、人々との交わりに招かれています。交わりに取り組むにあたり、いつもこのことを心に留めておきたいと思います。さて、宣教司牧方針の「交わり」の項目には、以下のように書かれています。

すべての信者とキリストに従う人々がキリストに招かれた共同体のメンバーとして大切にされる共同体を目指す。

- (1) 神と、自然と、人びと（教会と社会）との交わりのうちに生きていることを自覚し、深める。
- (2) わたしたちは、世代、国籍、役割、在籍期間、教会に来ることができるかどうかに関係なく、皆がキリストによって一つにされた共同体のメンバー。対話の内に互いに相手から学び合い、互いに変えられ、ともに成長していく。
- (3) 主日のミサはわたしたち教会共同体の交わりの中心。神と人びとの交わりを大切にして典礼に与る。

神との交わり

父と子と聖霊の名によって洗礼を受け、新たないのちを生きる私たちは皆、神との交わりの中にいます。三位一体の神の交わりに招かれた私たちは、ミサの中で御聖体を通して主の

死と復活にあずかり、キリストのうちに生きる者となります。そして、キリストの体をいただく私たちは、キリストによって一つの体、一つの共同体とされるのです。「パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つのからだです。皆が一つのパンを分けて食べるからです」(一コリント 10・17)。こうして、神との交わりは人との交わりへと広がっていきます。

人々との交わり

洗礼によってキリストと結ばれた私たちは、例外なく、すべての人が教会共同体のかけがえのないメンバーです。教会はすべての信者にとって、それぞれの背景に関係なく「私たちの教会」であり、誰も「お客様」ではありません。シノドス流の教会は、すべての信者に聖霊が働いているという事実に信頼し、互いに耳を傾けることによって聖霊の導きを識別し、従っていくよう招きます。違う文化的背景を持つ人たちが交わりのうちに互いの文化を知り、尊重し、その上でひとりの人として親しくなっていくようにしたいものです。ところで、福音書によるとイエスはいつも律法を守れるような人ではなく、様々な理由で律法を守れない人の側に立ちました。交わりの実践は、例えば教会に来ることのできない人の視点で取り組むことが大切です。

自然との交わり

神は、この世界を極めて良いものとしてお造りになりました。この世界に存在するすべてのもの一つひとつが極めて良いものであるのと同時に、すべてのいのちが生きるために、他の存在を必要とするこの世界の仕組み、関係も極めて良いものです。イエスは野の花、空の鳥を見て、神がいのちを養っておられることを感じる方でした。私たちも神の創造のわざを賛美し、感謝したいと思います。そして、私たちもイエスと同じ目線で、自然との良い関係を作っていきましょう。

目標についての具体的な呼びかけ

宣教司牧方針の「交わり」の項にある「具体的には」の他に、以下のうちから、それぞれの共同体の状況に合うものに取り組んでください。

- a) 各教会共同体で宣教司牧方針の交わりのページを読み、これまでの取り組みについて分かち合う。各教会は、取り組みについて、またその他の感想などを5月末までに教区事務局に送り、教区事務局は各教会の報告をとりまとめ、各教会共同体に送付する。各教会共同体は、他の教会の取り組みから学び、実践に生かす
- b) 共同体のため、特に教会に来ることのできない人のために祈る。また、教会に来ることのできない人を訪問するなど、交わりの方法を探る
- c) 互いのことを知り、学ぶため、各教会共同体で高齢者、外国籍の方、若い世代、子どもとその親などの声を聞く集いを行う
- d) 神の創造のわざに感謝し祈る、ミサなどの集いや、自然環境を大切にする取り組み

を行う

- e) 地域の人々、例えば近隣の人や、カトリック施設の関係者との交わりの機会（クリスマスミサやバザーなどの催し等）を増やす
- f) 教区の諸委員会、地区協議会は、それぞれの分野と場で交わりを深めるために取り組む。特に、情報共有を心がける

なお、シノドス第16回総会最終文書は、「シノドス流」の意味を次のようにまとめています。

簡単にまとめるとシノダリティとは、教会をより参加型で宣教的にするため、つまり、すべての人とともに歩みキリストの光を輝かせることのできる教会にするための、靈的刷新と構造改革の道だといえます。（28）

交わりも、参加も、教会が内部で結束を強めるためのものではなく、宣教のため、地域でキリストの光を輝かせるためのものだということを忘れないようにしましょう。

目標を決め、ともに歩むと聞くと、どうしても「やることが増える」という思いが頭に浮かぶかもしれません。宣教司牧評議会で行われた小グループの分かち合いでは、複数のグループで「信仰の喜び」が大切だという意見が出ました。何をするにも、義務とか、規則だからやるのではなく、キリストの福音を伝えられた喜び、その福音を生き、伝える喜びのうちに取り組んでいきたい。そんな意見でした。「交わり」とはまさに、信仰の喜びを人々とともににするということではないでしょうか。

神がわたしたちの歩みを祝福し、歩みをともにしてくださいますように。その喜びを私たちがともに人々に伝えることができますように。

いつも ふくいんを ともに